

宮崎県保育連盟連合会の皆さん ようこそ陸前高田へ

2014. 6. 20

陸前高田市保育協会
広田保育園

東日本大震災から3年3ヶ月陸前高田の今…

*被害の状況

陸前高田市は、矢作・気仙・横田・竹駒・高田・米崎・小友・広田の8町からなっています。横田町を除く7町が被害を受けました。特に、高田町の17地区中15の全域の被害が著しく、仮設住まいを余儀なくされています。市外・県外への避難者も多く、そのまま永住される方もおります。

※ 犠牲者は、死者 1,560 名・行方不明 207 名。
震災前人口 2万3千人 程、現在 1万9千3百 余名。

*住まいの問題

最も関心の高い市・県の災害公営住宅（計 1,000 戸）の建築工事が始まり、各町単位に建設される予定です。また、集団移転工事（19 団地）がスタートし、H26年度9月の完成予定となっています。自力再建の数は把握していませんが、50～100に近いと思われます。

*造成工事

現在進めているベルトコンベアー（工事費 125 億円）による土の運搬は、高田町の旧市役所をJRの駅とし、その北側全域を標高 8m の盛り土となります。

なお、ベルトコンベアーで運ばれる1日分の土は、トラック3千台分となり、トラックだけで10年、コンベアーでは1年2か月と大差があり、嵩上げされた一帯は、商・工街に捉えられております。

*公共施設の高台移転

保（公2・法2）幼1・小3・中3・高2の学校、県立病院・保健センター等の公共施設は、H29年度に完成予定と計画されております。

被災した民間保育園の1か所はヤマト財団の支援により、H25年4月に再建、被災した公立保育所2か所のうち高田保育所は、認定保育園としてH27年度から開所の予定です。私立幼稚園1か所は、現段階では再建の見通しがありません。

被災した広田保育園は、日赤を通してマレーシアの赤十字からの支援でH26年12月完成予定で、再建・移転します。3年10か月という当初の希望とはかけ離れた年月が費やされることとなりました。

いのちを守る！ 保育の重み 民間保育園で

陸前高田市保育協会 広田保育園 園長 藤倉 啓子（58歳）（2013.3.31退職）

誰もが予想していないあの日の出来事から今日まで、保育関係機関をはじめ全国の皆様からの物心両面のご支援のお蔭で、今ここに保育を再開しています。特に私保連様のご配慮には、みんな勇気づけられ、組織の違いはあるものの保育を支える仲間がいることに大変力強さを感じ、復旧活動への活力も増してきました。本当に感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

当時私は、広田保育園の園長をしていました。

広田保育園は、海から1 kmもない海拔10 mの場所で、広田中、高田高校広田校舎を両隣にした小高い場所にあり、漁業で栄えてきた広田半島の中心部にあります。

当時の定員は90名、114名の入所、職員は22名、当日の出席は96名でした。避難訓練は毎月様々な想定のもと真剣に取り組んできました。しかし、津波については、お散歩に出かけた海岸からの避難想定で、園まで戻るというものでした。宮城県沖地震の津波想定のはザードマップでは、園舎は浸水域から、はずれていました。

より安全なところへ、4回にわたり避難

私は、市役所での会議が3時半から召集されており、所用もあるので早めに出掛けようと準備をしてカバンを持ち、今まさに出ようとして事務所にいました。園児らは、午睡から起きる寸前でした。

[一次避難] 最初から、普通の地震ではないと感じ、天井が落ちるのでは？と思い、すぐに、いつものように放送で指示を出そうとしましたが、すでに電気は切れていて放送はできず、窓から大声で園庭に出よう指示しました。園児たちは、パジャマのまま職員と共に**園庭**に集合して人数確認をし、地震が治まるのを待ちました。

これは長引きそうだと思い、職員を半分に分けて子どもの衣服を取りに行かせ、靴は下駄箱から放り投げて自分のものを履かせ、職員には交替で貴重品を持たせました。小さい組の子らは、すぐにおんぶをし、子どもの毛布なども持てるだけ持ちました。

なかなか止まない地震で、園庭にはひび割れが発生しました。

[二次避難] ここは危険と判断し、園舎その物が倒れても危険のないような**駐車場の隅**に、全員移動。隣の広中は地域の避難所でしたが、保育園のほうが高いので、**周りが見えるその場所**で待機していました。その間、保護者らが次々迎えに来ましたので、名簿でチェックしながら引き渡しをしました。

防災無線で「**大津波警報です!**」と放送しているのが聞こえましたが、実感がありませんでした。ただ、地球の内部がかなりの大きさと破壊されているのではないかと、この後何が起こるのか、とても不安でした。子どもたちは、職員の指示に従い、騒ぐこともなく待機していました。小さい子の中には、担任にしがみついている子も当然いました。

ふと山際を見ると、煙のようなものが見え、「**火事?**」でもないようだが、と、私が移動して海の見えるところまで行ってみると、あの高い堤防にドーンとぶちあたり、近くの大きな家のみ込む、津波の第一波が見えたのです。

[三次避難] すぐ全員に移動を指示し、隣接する旧広水高校のグラウンドに登りました。後ろから、広中の生徒も追いついてきて、斜面の登り口で2～3歳児の手を引いてくれたり、押しあげてくれたりしました。

最後尾の職員が後ろを見ると、保育園の入り口の30m近くまで波がきていたということです。高いグラウンドまで上がり人数を確認すると、園児は39名・職員は19名でした。そこでも、園児の迎えが数名あり引き渡しをしました。それは、帯を携えて山道を歩いてきた祖母たちでした。そこでも「もっと大きな津波が来るぞ!」ということで、さらに杉山にも登りました。この時も中学生たちが手を引いたり「がんばれがんばれ!もう少しだ!」と声をかけてくれました。隣接した校舎でしたし交流事業等も毎年行っていましたから馴染みもあり、自然にこのようなことができたのではないかと思います。とても感謝しています。

[四次避難] 次第に薄暗くなってきたころ、被災していない近くの広小に移動するように指示があり、地域の消防や市職員の方々に見守られながら、おそるおそる浸水域を渡りました。

広小の体育館でも園児を引き渡し、残った子ども10名と帰れなくなった祖母と園児1名、職員18名が広小の体育館で一夜を明かすことになりました。

夕方になり地域の方が炊き出しをはじめ、園からお手伝いや見張りをつけながら、残っていた食材を取りに行き提供しました。おにぎりが1個ずつ配られ、真っ暗な体育館で身を寄せながらいただきました。

雪がちらつく寒い日で、繰り返し起こる大きな余震に体育館の天井が落ちるのでは?と、不安と恐怖の一夜を過しました。小さい子もいましたが、幸いにして夜の間泣くこともなく過ごすことができ助かりました。

毛布も届けられ、ダルマストーブを囲みながらでしたが、横になれば肩が、起きていれば腰が冷えて寒く、また、携帯電話も不通で、職員も家族の安否や自宅の状況もわからない中での長い長い夜でした。

引き渡しに関して次のようなことがありました。

小学生の自分の孫と隣家の小学生を迎えに来た祖母から、隣家の孫である年長児も連れて帰りたいとの申し出がありました。兄も妹を連れて行きたいと言って泣くし、繰り返し懇願されました。しかし、保護者から依頼されたわけではなく好意での申し出なので、お断りしました。無事に帰宅したことの確認も、この状況ではできないうえ、どこで何が起こるかわからないので、丁重にお断りしました。その後、保護者から「あの時、帰されなくてよかったんです。」「兄たちは、帰宅途中で津波に遭遇し危なかったんです。」と報告がありました。

津波は何度も繰り返されるということ、引き渡しのルールも周知しておかなければならないことなど、考えさせられたできごとでした。

2日目 — 無事をよろこびあい

大船渡市や高田町などから、徒歩で迎えにたどり着いた保護者らと感激の対面がありました。「先生!子どもを守ってくれてありがとう!」と抱き合い、子どもと互いの無事を喜び合いました。翌日には、ほとんどが迎えに来て引き渡し、職員も3人を残してとりあえず帰宅することにしました。車も被災したので、走っている車に数人ずつ便乗させてもらったり、歩いたりして、

それぞれ帰宅しました。12日の晩は、子ども1人と3人の職員で過ごし、3月13日には、園児を全員引き渡すことができました。

炊き出しで、おにぎり1個、多少のおかずも配布されました。湯飲み茶わんで味噌汁もいただきました。洗えないので、マイカップ・マイお箸にして使いました。

被害状況

保育園の被害は、外側1m20cmの浸水、園内は高いところで60cmの浸水でした。午睡用の布団は、すべて泥だらけ、給食室の冷蔵庫等は横倒し、廊下の角には瓦礫が棚と共に引っかかり、事務書類が泥だらけで散乱していました。駐車場には、隣の広中の作業室の屋根が流れ着いていました。隣接する両方の学校は、1階の天井まで浸水被害を受けていました。また、小高いところにあつたので斜面があちこち崩れていました。

人的被害では、園児1名が帰宅途中に津波に遭遇し亡くなり、父親が行方不明の子が1名、母親が行方不明の子が1名。そのほかは、職員も園児も無事でした。

自宅が被災した子は18名、職員では、家族・近親者を亡くしたものが5名、自宅の被災は8名、車の被災は9名でした。また、長年保育士として慕われていた元職員も民生委員として活動しているなかで、亡くなりました。

このように、これまで経験したことのない大変なことが起きたのに、感情が凍ってしまったかのような不思議な感覚でした。

子どもたちに自由な時間を 復旧活動への道

何か別の世界に仮に住んでいるような現実感のない日々がはじまりました。自動車が使えないので、時間がゆっくり流れた日々でもありました。家族や知人に便乗させてもらいながら何とかして園に通う毎日でした。

保育協会の本部も、市役所庁舎の中に在ったので全壊です。連絡も取れない状況です。市の福祉事務所からの指示を待ち、仮市役所の給食センターに立ち寄りながら通勤し、取り敢えず重要書類だけでも探して乾かすことからはじめました。その後、自宅の被害のない職員を召集して、園児の持ち物の始末をし、各避難所や園の前にポスターの裏に手書きのお知らせを貼って引き取りをしてもらいました。

福祉事務所からの指示もあり、全園児と家族・職員の安否確認、所在確認を手分けして行いました。自動車が被災しているので、グループになって相乗りをし、歩きながらの家庭訪問でした。

名簿は、クラス毎のものだったので、地域ごとに書き直し、家族の状況や避難先なども記入できるように手書きでつくりました。パソコンに頼っている毎日にとっては、かなりの作業で電気がないので明るいうちにしなければならず、大変でした。

避難所での子どもたちは、地域のみなさんにかわいがられ楽しげでしたが、避難所の暮らしはプライバシーもなく自由も束縛されていました。衛生面も気になりました。何より子どもたちは訪問した私達に「せんせいがきた！」と行って飛びついてきました。保育園での暮らしが当たり前の日常だったので、どんな思いで過ごしていたのでしょうか。

この訪問活動から、子どもたちに2時間でもいいから自由な時間を保証してやりたいと、そんな思いを強くしたのです。

90名の園児の受け入れ先は 保育再開に向けて

3月20日、市内の保育所・園の所長会議が市の福祉事務所より召集されました。

市内の公立保育所5か所のうち2か所が流出、法人立保育園5か所のうち、1か所大規模半壊、1か所は浸水半壊と、4か所が被害を受けていました。

公立1か所は同じ町内の隣の施設に同居、もう1か所は新築移転して空いた法人立保育園の園舎を間借り、法人立保育園の1か所は隣町の園に同居、との案がだされました。肝心の広田保育園は半島にあり、隣町には規模が小さい公立保育所があるものの、90名定員のはいれる余地はありません。また、隣は大船渡市であり借りられそうな場所はありません。町内の公共的な施設も被災し、地域の公民館等はすべて避難所になっていました。唯一残った広田小学校も避難所になり、ごった返していました。

90名の園児を受け入れられる場所！ どこにも見当たりません。

周囲がこのような中、何とか保育を再開するには、どうしたらよいか？

広田保育園の場合、幸いにして小高い所にあったせいで、園舎は大きく損壊しておらず、泥水も早くひいて砂だけが残っていました。とりあえず雨風は凌げると考え、苦渋の選択でしたが再開することにしました。

しかし、この場所でこの先も続けるということではなく、仮に再開するという考えでした。この現実の中で、十分ではないが、できるだけのことをするという事です。浸水域だという不安は勿論、周囲の環境も衛生面も問題だらけなのですから。

市内全体の保育を、4月15日をめどに再開しようという決定がなされ、それに向けて復旧作業がはじまりました。

水が出ない 電気も切れたままの状態、園への登り口の土手が崩れたまま。

流出したフェンス、浸水した事務機器、電気設備の点検、交換、業者への連絡もままならない状況でしたが、訪ね歩いたり、内陸に足を運んで電話をする日々。

何より水が出ないので、給水車の水を子ども用のプールに分けてもらい、沢の水を汲みに行ったりしながら、園舎の掃除をはじめ。水汲みをして運び、床に撒いてブラシでこする。

くり返しくり返しやり、泥がでなくなってから、消毒する。これを毎日毎日黙々と行う。

高圧洗浄機が欲しい日々でした。

自宅が被災していない職員が、おにぎりをはじめ、カップヌードルや支援で配布されたものを持ち寄り、皆で分け合ってお昼を食べ、夕方は寒くなるし、トイレにも困るので早めに帰宅する日々でした。職員同士がこの様な形で密接に繋がることが少ない日常からは、この様な苦しい状況の反面、生きて、力を出し合っているという強い連帯感を感じさせられるものでした。

後になってからは、とても懐かしい作業の日々でした。

再開は決めたものの衛生面が心配で、保健所に問い合わせをして指導を受けました。

4月15日の時点では、水は西日本の自治体からの給水車、電気は発電機で、トイレはエコトイレ（大学の教授より指導を受ける）、おやつは一関からの支援で繋いでいただき、午前保育からの出発でした。

まだまだ保育に十分な環境ではありませんでしたが、いくらかでも以前の日常に近づけることが求められている事態だと考え、目の前のできることから歩きはじめようと決意しました。その

後、様々な支援も入り、慣れない要請活動も行いながら少しずつ動き出しました。

肝心の避難路の整備も市に要請しました。この隣接する高台のグラウンドがあるからこそ、危険や不安がありながらも仮の保育をしようと決断したのですから。

5月の中旬からは、食材も手に入るようになってきたので、1日保育を実施しました。この頃から、子どもたちが徐々に落ち着いてきたように感じました。しかし、度重なる大きな余震に脅え避難を繰り返ししなければならない日々のはじまりでもありました。

早く、次の手だてをと願いながらも、このとてつもない混乱の中、何事もすぐに解決する状態ではありませんでした。子どもも保護者も、そして命を託されている職員も、不安を背に毎日を送らなければならない日々でした。

子どもの健やかな成長をささえるために

保護者の労働を支え、子どもの健やかな成長を支える保育の仕事が、これまでとは違った重さで私たちにのしかかってきました。

整った環境の中で、より良い保育をと願ってきた保育でしたが、もっと深く、重く、保育の必要性を感じました。

人間としての生き方が問われる。ともにこの状況から、「諦めずに、一つひとつ考えられることを工夫して生きていくんだよ」ということを、子どもたちに見せなければ、伝えなければ、と強く思いました。

しかし、被災した人々や亡くなった人々の無念を思うと、あまりに大きな塊で、心が崩れそうになり、必死に心を固めて自分の目の前だけを見るようにして暮らした日々でした。

市の職員のなりふり構わずに働くその姿に触れては、あの人も、この人も、被災したり最愛の人を失った中で頑張っていると、励まされたり遠目に心配したりする日々でした。

浸水した保育園の再建が国の援助でできないような貧しさでは、少子化対策や、今後の日本の未来を託す人材を育成することは、できるのでしょうか？また、今の最低基準では、この震災を受けた子どもと、その保護者を支える保育を充実させることが、非常に大変なことは目に見えています。人が人を育てるのです。

一朝一夕に誰かがやってくれるのではないことは確かです。

どんな仕事も本当に必要で、人々に求められています。その基本を支えるのが自治体であり、福祉の分野の仕事であることが、これまで以上に鮮明になったできごとでした。ここをおろそかにしては、社会は成り立ちません。

一人ひとりの力を結集すれば、やがて大きな事も成しえることが、この震災を超えて、みんなが感じたことではないでしょうか。

微力ながらも、この時代に遭遇したものとして、広い社会の一隅を照らせるように生きていきたい。無念の思いで亡くなっていった人々の力も生かしながら。

**浸水域での仮の保育が、1日でも早く、そして安全に、
本当の保育ができる日を切に願います。**

復旧活動開始

業者との連絡もままならず、訪ね歩いたり関連業者から聞いたりして、点検・発注をしました。保健所にも電話をして消毒等の相談・アドバイスをいただきました。

余震も多く更なる津波への不安もあり、市を通して隣接するグラントへの避難路の整備を要望しました。

やるからには、大限の努力をし、できることを全てやる！
まず、自分達ができることから一歩ずつ進もう！

このことを胸に活動開始！

復興へ向かって

大きい備品は、当初ユニセフ様が現地入りしてくださり、給水の問題から備品の調達など大変お世話になりました。続いて、保育関係団体の皆様が現地で必要なものは？と声をかけてくださったことに対し、大変恐縮しながらもお願いし、被災した備品を整えていきました。

地域のコミュニティセンターからは、発電機・灯油・ダルマストーブなどが届けられ、厨房の大きな力仕事も手伝っていただきました。

その後も次々に全国からご支援をいただき、家庭での子どもの生活から園での必要なものまで揃えられ、以前のような保育に近づいていきました。

その後、物的な支援だけでなく、それぞれの立場でのご支援に変化し、子どもたちはこれまで経験したことがない様々なものを“見” “聴き” “楽しむ”ことができました。

団体の皆様は勿論、個人でも何かしたい、できることで支援をしたい、ということで沢山の方々から様々な形でご支援を受けました。

こんなに多くの方々私たちが私たちに気にかけて心配して下さっているということに、本当に心がふんわり温かくなり、また、お力をいただき、復興への希望にもなりました。

沢山の若者もボランティアに関わり、頼もしく思い、日本も捨てたもんじゃないという思いを強く持ちました。

こうして、余震や更なる津波を恐れながらも日々を過ごしてきましたが、一番は、再開していることで移転が遅れるのではないかということでした。再開してまた犠牲者が出たら大変です。一日、一刻も早く移転をしたいのです。

そう簡単には、いかないこともわかりますが、そこに向かって動きつつあることを頼りに、一日一日を過ごしております。

保育園はみんなの希望！

地域の皆さんが、早く保育園を高台に、と願っています。

保育園が再開することで地域が元気になる。地域が元気になることで保育園も活用され、相互作用で復興へと進んでゆくのではないかと考えています。

震災から教訓

- * 有事の際は、状況を把握する。見る・聞くなど様々な方法を駆使して情報を得る。判断は迅速に行う。
- * 津波は、震度3でも起る。3分で来ることもある。何分で何をどれくらいできるか訓練し、把握しておく。これを元に落ち着いて行動する。
- * 様々な想定のもとに、真剣に訓練に取り組んでおく。
- * 地域との連携を密にしておく。
- * 名簿はクラス毎の他、地域ごとの物も作成しておく。筆記具・メモ用紙も常備しておく。帯も園内の移動の際も必ず持ち歩く。
- * 人のつながりを大事にする。人を信頼し感謝の気持ちを持ち続ける。
- * 困った時は、助け合う。このことが人間として自然なのだということを、子どもたちにも教えていく。

まだまだ、安心という暮らしではないのですが、あの日から2年を目前にした「今」をまとめておくことにしました。